

地蔵信仰について

平成28年12月28日

岩井國臣

はじめに

[六堂の辻・西福寺](#)では、昔、お盆に住職が西福寺に保存されている地獄絵の解説をしておられた。その住職が亡くなられてからは、現在、住職による絵解きは行われなくなっているが、[地蔵菩薩は地獄とこの世を自由に往来されて、私たちの切ない祈りを聞いて、亡くなった子どもや親を地獄の苦しみから救ってくれる](#)、そういう意味のことが地獄絵には描かれているのだと思う。

そういう切ない祈りでなくとも、常日頃地蔵菩薩に祈っていると、自分自身、死んでも地獄へは行かず天国に成仏できるのだと私は思う。いろんな地域でお地蔵さんの祠を見るが、お花が飾ってあったりお供え物がしてあることが多い。近所に信心深い人がいるのだろう。そういう信心深い人は、死んでも地獄へは行かず天国に成仏できるだろう。

私などは、どちらかいうと信心のあまりない方であるが、対象物は何でもいいから、ともかく祈るということが大事だと思っている。祈りのある生活をしたいたいものだ。

私はどちらかいうと信心のあまりない方であるが、[私の記憶の中では、お地蔵さんに対する記憶が圧倒的に多い](#)。

私の記憶にあるお地蔵さんは、奈良を中心に、十一面観音と対になって祀られている地蔵菩薩とはまったく違うが、京都の寺町三条の矢田寺に祀られている地蔵菩薩とは、どうも同じ範疇のものらしい。

しかし、二つの範疇に入らないお地蔵さんがある。私の好きな昔話に「[笠地蔵](#)」というのがあるが、村はずれの峠などに祀られている笠地蔵のようなお地蔵さんのことだ。

私は、十一面観音と対になって祀られている地蔵菩薩と矢田寺に祀られている地蔵菩薩と笠地蔵のようなお地蔵、それら三種類の地蔵がどのような経緯で祀られるようになったのか、それを明らかにしたいと思った。この論文はそのためのものである。

第1章 地蔵菩薩信仰の始まり

滋賀県立近代美術館では平成22年10月19日(火)から11月21日(日)まで企画展「生誕100年特別展『白洲正子 神と仏、自然への祈り』」を開催した。

<http://www.shiga-kinbi.jp/?p=9338>

その白洲正子生誕100年特別展については、岐阜県安八郡神戸町が素晴らしいホームページを作っていて、「白山比咩（ひめ）の幻像」については、そのホームページに詳しい。

<http://www.goudomatsuri.com/arekore/shirasu-masako/kami-to-hotoke.htm>

つまり、そこには、白洲正子「十一面観音巡礼」という本の中の「白山比咩の幻像」というところに書かれている文章の全文が掲載されていて、白洲正子の名文をネットで楽しむことができる。しかし、それはコピーできない仕掛けになっているので、私は、白洲正子「十一面観音巡礼」（2010年2月、講談社）より肝心の部分を抜き書きして、皆さんに白洲正子の感性と見識の素晴らしさを紹介しておきたいと思う。

白洲正子「十一面観音巡礼」（2010年2月、講談社）より抜き書きした肝心の部分とは以下のものである。

木地師とは言わないまでも、何か神社を回って歩く旅の彫刻師に、御神体の面や神像を専門とする、特殊な集団がいたのではあるまいか。たとえば、「飛驒のたくみ」と呼ばれたような、流浪の工人たちである。

前に能面を見て歩いていた頃、公けに知られている彫刻とは別に、山岳信仰と結びついて、そういう流れがあることに私は気づいていた。それは民衆の生活に深く浸透しているに関わらず、案外人に知られていない。が、そこにはほんとうに日本の土から生まれたものがあり、私たちの祖先の血がかよっているように感じた。この（日吉神社の）十一面観音を見て、私はその想いをあらたにする。これは都の仏師が造ったものではなく、山から山へ、里から里へ放浪した、無名のたくみが彫ったものに違いない。重文などに指定されたのが、むしろ不思議なくらいに思われる。

白山は越前、加賀、美濃の三国にまたがる霊山で、養老年間に、泰澄大師によって開かれた。泰澄は白鳳11年（683）6月、越前麻生津に誕生したが、夏であるのに、その日は白雪が積もったという。幼い頃から「神異の童」と呼ばれ不思議な霊力を持つ少年であったが、14歳の時、越智（おち）山にこもって、十一面観音を念じ、自ら髪を剃って比丘となった。麻生津も、越智山も、福井県の西側にあり、そこからは白山の全景がくまなく見渡される。彼は白雪にかがやく高峯を望んで、そこには必ず神霊がこもっているに違いないと信じ、いつの日か登りたいを願っていた。ある夜の夢に、美しい天女があらわれ、「早く来るべし」とのお告げをうけ、養老元年4月、九頭竜川をさかのぼり、大野郡から平泉寺を経て、白山の頂上に至った。頂上には、深い緑をたたえた池があり、そのかたわらで祈っていると、九頭龍神が池の面に出現した。泰澄は、これは方便のすがたで、まことの神ではないと見破り、更に念じていると、全身に光を放って、妙相端嚴たる十一面観音が現れた。泰澄はその前にひれ伏して、衆生の為に慈悲をたれ給えと祈ったが、三拝もせぬ内に、観音の姿は消え失せたという。

泰澄の前に出現したその十一面観音とは、泰澄の頭の中に刻み込まれたであろうが、私たちはそのお姿を想像しようもないが、白洲正子はその鋭い直感で想像しておられる。それは、上に紹介した神戸町のホームページに掲載されている「白山比咩（ひめ）の幻像」として紹介されているものである。それは、神戸町の[「日吉神社」](#)の木造十一面観音像である。

その後、泰澄は三年の間山にこもり、修行をつんで「越の大徳」と呼ばれ、元正天皇が病になられた時は、祈祷のために平常宮に招かれた。そして、養老3年（719）からは越前国を離れ、奈良は言うに及ばず各地にて仏教の布教活動を行う。聖武天皇が大仏造立の詔を発する以前のことである。その泰澄の布教活動によって地蔵菩薩が作られていった。泰澄は地蔵菩薩の生みの親である。したがって、地蔵菩薩の謂れを知るには泰澄の始めた「白山信仰」を知らねばならない。

私は、[「白山信仰について」という論文](#)で、白山における信仰の段階を四段階に分けて理解することとした。第1段階は磐座（いわくら）・磐境（いわさか）に対して祭祀を行った縄文時代の信仰、第2段階はシラ信仰、第3段階は菊理媛（くくりひめ）信仰、第4段階は現在の白山（はくさん）信仰の段階である

「シラ信仰」とは、① 沖縄や伊豆諸島に伝わるシラの神、② 奥三河の花祭り、③ 立山芦峯寺の布橋灌頂、④ 遠山郷の霜月祭りなどの、あるいはまた私たち人間と世界と天なる神の世界を繋ぐ・・・まあ言うなれば、[繋ぎの神](#)の祭り、一言で言えば、豊穰や誕生を祈る祭りをを行う信仰である。

繋ぎの神は、片や集落の繁栄を祈るものとして、① 沖繩や伊豆諸島に伝わるシラの神、② 奥三河の花祭り、③ 立山芦峯寺の布橋灌頂、④ 遠山郷の霜月祭りなどを生み出し、片や個人の幸せと願うものとして地蔵菩薩や道祖神などを生み出すのである。これを、私は、繋ぎの神の進化と呼んでいる。

現在の信仰は古代の信仰とつながっている。もちろん、時代の影響を受けて、そのやり方は変化してきてはいるが、現在の信仰の姿の中に、古代の信仰の面影が残っている。地蔵信仰は、仏教伝来以降、仏教寺院で祀られる地蔵菩薩信仰に始まるが、それは地の神に対して豊穰や誕生を祈るものである。美濃馬場・長滝白山神社で現在行われている「花奪祭（はなばいまつり）」はシラ信仰の名残であるが、シラ信仰は古代の信仰として仏教伝来以前から存在したものと思われるが、それが繋ぎの神の進化とどのような関係にあるのかはよくわかっていない。しかし、泰澄は、「花奪祭（はなばいまつり）」が地の神に対して豊穰や誕生を祈る祭りであることを十分知っており、地の神に対する信仰の重要性を十分認識していたと思われる。

白洲正子「十一面観音巡礼」（2010年2月、講談社）の解説で、小川光三は、「十一面観音と地蔵が一对に祀られるのは、天の神の依り代の神籬（ひもろぎ、神の依り代となる木）と、地の神の出現する磐座が、一对に祀られていたことに起因する。」と書いているが、十一面観音は天の神で地蔵菩薩は地の神である。繋ぎの神は本来天の神と地の神をともに祀るものである。

そのようなところから、泰澄は、十一面観音を祀ると同時に地蔵を祀ることを推奨したのだと思う。

十一面観音の信仰は、泰澄に始まったとって過言ではあるまい。

第2章 矢田寺に祀られている地蔵菩薩

京都の繁華街といえば京極である。最近では京都駅も賑やかになってきているが、やはり京極というか河原町通を中心に御池通から四条通にかけて、私は一番注目されて良い場所であると思う。ただ単に商店があるというだけでなく、これほどわくわくする「知のトポス」は他にない。寺町三条を少し上がったところに、[矢田寺](#)がある。

矢田寺には十一面観音は祀られていない。したがって、泰澄が始めた地蔵菩薩とは全く違う。

「はじめに」では、『[六堂の辻・西福寺](#)では、昔、お盆に住職が西福寺に保存されている地獄絵の解説をしておられた。その住職が亡くなられてからは、現在、住職による絵解きは行われなくなっているが、[地蔵菩薩は地獄とこの世を自由に往来されて、私たちの切ない祈りを聞いて、亡くなった子どもや親を地獄の苦しみから救ってくれる](#)、そういう意味のことが地獄絵には描かれているのだと思う。』・・・と述べたが、地獄絵の意味するところのものは、亡くなった子どもや親があので地獄の責めに合わないよう、地蔵菩薩に救いを求めるものである。そのための行事がそもそも「お盆」であるが、六堂の辻では、その「お盆」の行事として「六堂まいり」が古来から行われてきたようである。その謂れは次の通りである。

この世とあの世の境目が、古来より六堂の辻あたりであるといわれ、あの世の入口と信じられてきた。この「六道の辻」の名称は、古くは「古事談」にもみえることより、この地が中世以来より「あの世への通路」として世に知られていたことがうかがえる。

このような伝説が生じたのは、六堂の辻あたりが鳥辺野（三大風葬の地のひとつ）に至る道筋にあたり、この地で「野辺の送り」をされたことより、ここがいわば「人の世の無常とはかなさを感じる場所」であったことと、小野篁が冥土通いのため、珍皇寺本堂の裏庭にある井戸をその入口に使っていたことによるものであろう。

現在、[「六堂まいり」](#)は、先祖の霊をお迎えする京の風物詩となっている。

一方、矢田寺は、家に戻ってきた先祖の霊をあの世にお送りする行事を行っており、それは珍皇寺の「六堂まいり」と一対のものとなっている。両者で違う点は、地蔵菩薩である。珍皇寺の地蔵菩薩が多くの石像であるのに対して、矢田寺の地蔵菩薩は、俗に「代受苦地蔵」と呼ばれ、燃えさかる火焰を前にして、まさに地獄の中に現われたかのごとく道具立てが見事である。

小野篁（たかむら）が、あるとき、閻魔大王の要請を受けて、奈良は郡山（こおりやま）の矢田寺の住職で有徳の誉れも高い満米（まんまい）上人を地獄に招待、八寒八暑の地獄を案内した。そのとき火焰の中で亡者（もうじゃ）を助けようと一心に働いている僧を見つけた。いぶかしむ満米上人に向かってその僧は、「私は地蔵菩薩である。娑婆（しゃば）に戻ったら私の姿を造れ。生きている人を済度してやろう」と告げたという。地獄から帰った満米上人は小野篁の協力を得て、承輪12年（845）に郡山の矢田寺に模した別院を五条坊門のあたりに建立し、地獄で出会った地蔵菩薩を写したお地蔵さんを本尊にした。その後、応仁の乱などで伽藍は焼失して転々としたが、戦国時代の天正七年（1579）に現在地に復興された。

矢田寺本堂のひさしにつるされた鐘は、珍皇寺の「迎え鐘」に対して「送り鐘」と呼ばれ、死者の霊を冥土に送り返すときについたという。今では日々の苦が鐘をつくごとに消えていくといわれている。是非是非鐘をついてください。この鐘をつき、高野槇を納め、絵札を買ってくる・・・、これがお盆の習わしである。

お盆には・・・珍皇寺の「迎え鐘」の響きに乗って死者の霊が帰ってくる。この世に・・・そして、御盆のひとつきを私たちとともに過ごしたのち、矢田寺の「送り鐘」の響きに乗って帰っていく。

矢田寺の地蔵菩薩は、地獄とこの世を自由に往来されて、私たちの切ない祈りを聞いて、亡くなった子どもや親を地獄の苦しみから救ってくれる、そういう地蔵菩薩である。

ところで、「はじめに」述べたように、私の記憶にあるお地蔵さんは、奈良を中心に、十一面観音と対になって祀られている地蔵菩薩とはまったく違うが、京都の寺町三条の矢田寺に祀られている地蔵菩薩（代受苦地蔵）とは、どうも同じ範疇のものらしい。

延命地蔵菩薩経というのがあるが、そこに「若有重苦 我代受苦」とあって、地蔵菩薩は、「衆生にもしも重苦があれば、我が代わってその苦を受けん」と、お釈迦さんに誓っている。すなわち、代受苦地蔵は、亡くなった子どもや親を地獄の苦しみから救って欲しいという切なる願いだけでなく、生きている人間にももし重苦があれば、それを救ってくれるのである。そういう点で、私の記憶にあるお地蔵さんはすべて代受苦地蔵であって、矢田寺の代受苦地蔵とは姿は違っていても、同じ範疇のものである。

第3章 峠などに祀られているお地蔵

私の好きな昔話に「笠地蔵」というのがある。「はじめに」述べたように、村はずれの峠などに祀られている笠地蔵のようなお地蔵は、十一面観音と対になって祀られている地蔵菩薩と矢田寺に祀られている地蔵菩薩とは、どうも種類の違うお地蔵さんらしい。したがって、ここでは、峠などに祀られているお地蔵がどのような経緯で祀られるようになったのか、それを明らかにしたいと思う。

峠などとは、村はずれの峠、村境、道の分岐点、橋のたもとなどである。こういうところに祀られている神は、多種多様だが、本来は、どうも「くなどの神」とか「境の神」と呼ばれる神らしい。そのような神はどのような経緯で祀られるようになったのか、まずそれを勉強することとしたい。

古くは、京の都の四隅において行われた祭りで道饗（みちあえ）祭という祭があった。これは、京の都で行われた神祇令に定められた神道恒例の祭りであったが、疾疫あるときは臨時に諸国で行われたらしい。地方で行われた臨時の道饗（みちあえ）祭については文献がないので、その内容がはっきりしないが、京の都で行われた道饗（みちあえ）祭については、《令義解》や《延喜式》などの文献に出てくる。

《令義解》によると、鬼魅（きみ）が外から侵入してくるのを京の都に入れないようにするため、京の都の四隅の路上で饗応し遍（とど）むるのだという。また、《延喜式》の同祭祝詞によると、八衢比古（やちまたひこ）、八衢比売、久那斗（くなど）の三神をまつり、鬼魅・妖物の侵入を防ぎまもってもらうため、幣帛（へいはく）をたて祀って行われるのだという。

これらの文献によると、鬼魅（きみ）が外から侵入してくるのを防ぐ目的があったこと、久那斗（くなど）の神という神がいるということが判る。

ウィキペディアによると、「くなどの神」とは、民間信仰において、疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が聚落に入るのを防ぐとされる神であると書かれており、「久那土」には「岐」という漢字が当てられている。そして、「くなど」は「来な処」すなわち「きてはならない所」の意味であるとされている。

私は学者でないので、これ以上のことは解らないが、「きてはならない」とは疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が来てはならないという意味であり、そういう疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が通るであろう道の分岐点、峠、橋、あるいは村境などに岐（く

など)の神を祀って、悪神・悪霊が村人の生活空間に入ってくるのを防ぐよう努めたのであろう。ウィキペディアには、そういう「くなどの神」に対する民間信仰が、[道祖神](#)の原型であると書かれている。

道祖神に関して、ウィキペディアでは、『平安時代の『[和名抄](#)』にはすでに「道祖」という言葉が出てきており、そこでは「さへのかみ(塞の神)」という音があてられている。すなわち、外部からの侵入者を防ぐ神であった』と説明されている。

また、「境の神」に関して、世界大百科事典 第2版の解説では、『サエノカミ(塞の神), ドウロクジン(道陸神)、フナドガミ(岐神)などとも呼ばれ、村の境域に置かれて外部から侵入する邪霊, 悪鬼, 疫神などをさえぎったり、はねかえそうとする民俗神である。陰陽石や丸石などの自然石をまつたものから、男女二神の結び合う姿を彫り込んだもの(双体道祖神)まで、この神の表徴は多様である。』と説明されている。

さて、「くなどの神」に関して、ウィキペディアでは、『平安後期以降では仏教の説く六道輪廻の概念から生じた末法思想を背景に、六道に迷った衆生を救う地蔵菩薩信仰が民間で盛んとなり、岐(くまど)の神として六地蔵が置かれるようにもなった。』と説明されているが、ここで疑問が生じてくる。岐(くまど)の神や境の神は、疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が聚落に入るのを防ぐとされる神であるから、本来、恐ろしい威力を持った神でなければならない筈であるのに、何故、六地蔵が置かれるようにもなったか？

六道に迷った衆生を救う地蔵菩薩(代受苦地蔵)については、第2章で述べた。

代受苦地蔵とは、亡くなった子どもや親を地獄の苦しみから救って欲しいという切なる願いだけでなく、生きている人間にももし重苦があれば、それを救ってくれる、そういうお地蔵さんである。そういうお地蔵さんが疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が聚落に入るのを未然に防ぐことができるのだろうか？それが私の抱く疑問である。

勝軍地蔵というのがある。地蔵菩薩が身に甲冑(かつちゆう)を着け、右手に錫杖(しゃくじょう)を持ち、左の掌(てのひら)に如意宝珠を載せ、軍馬にまたがった姿をしたものであるが、そういう悪と戦う威力を持った地蔵菩薩であれば、疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が聚落に入るのを未然に防ぐことができるだろうけれど、村はずれの峠などに祀られている「笠地蔵」のように、あの優しげなお地蔵さんがそういう戦う威力を発揮されるとは到底思えない。しかし、人々は、あの優しげなお地蔵さんでも、疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が聚落に入るのを未然に防ぐことができると考えて、実際に、村

はずれの峠、村境、道の分岐点、橋のたもとなどにあの優しげなお地蔵さんを祀った。その点、どう考えればいいのであろうか？

賽の河原で獄卒に責められる子供を地蔵菩薩が守る姿は、中世より仏教歌謡「[西院河原地蔵和讃](#)」を通じて広く知られるようになり、庶民感覚に大変化が起こったのではなかろうか。すなわち、私は、いつの頃かはっきりしないが、中世、つまり平安時代の末期ないし室町時代において、お地蔵さんというは、地獄であろうが村外であろうが異界と自由に行き来して、閻魔大王であろうが悪神・悪霊であろうが山賊であろうが、村に疫病・災害などをもたらさないよう説得してくれると、人々は考えるようになったのではなかろうか。つまり、平安時代の末期ないし室町時代において、お地蔵さんは、第2章で述べた代受苦地蔵という本来の姿から、より積極的に人々の災いを未然に防ぐ姿へと、進化を遂げられたのであろう。村はずれの峠、村境、道の分岐点、橋のたもとなどに祀られている「笠地蔵」のようなお地蔵さんこそ、庶民誰もが親しみの持てるかつ頼りになるお地蔵さんである。

おわりに

第1章において、『地蔵という名称は、「大地に万物を生み、諸宝を蔵す」という意味で、大地に豊穰をもたらす地の神であり、十一面観音と地蔵が一对に祀られるのは、天の神の依り代の神籬（ひもろぎ、神の依り代となる木）と、地の神の出現する磐座が、一对に祀られていたことに起因する。』と述べた。すなわち、十一面観音と対に祀られている地蔵菩薩が、泰澄の発想による日本最初の地蔵菩薩のタイプで、それは日本古来の繋ぎの神の伝統を引き継いでいる。

次に、第2章においては、『私の記憶にあるお地蔵さんは、奈良を中心に、十一面観音と対になって祀られている地蔵菩薩とはまったく違うが、京都の寺町三条の矢田寺に祀られている地蔵菩薩（代受苦地蔵）とは、どうも同じ範疇のものらしい。』と述べ、その起因について『延命地蔵菩薩経というのがあるが、そこに「若有重苦 我代受苦」とあって、地蔵菩薩は、「衆生にもしも重苦があれば、我が代わってその苦を受けん」と、お釈迦さんに誓っている。』と説明し、さらに『代受苦地蔵は、亡くなった子どもや親を地獄の苦しみから救って欲しいという切なる願いだけでなく、生きている人間にももし重苦があれば、それを救ってくれるのである。そういう点で、私の記憶にあるお地蔵さんはすべて代受苦地蔵であって、矢田寺の代受苦地蔵とは姿は違っていても、同じ範疇のものである。』と述べた。すなわち、矢田寺に祀られている地蔵菩薩および私の記憶にあるお地蔵さんは、ともに代受苦地蔵に起因する。その代受苦地蔵という考え方は、平安時代初期に、珍皇寺において小野篁が大きく関与して広まった思想である。珍皇寺のお地蔵さんもそういう地蔵である。

次に、第3章においては、『人々は、あの優しげなお地蔵さんでも、疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が聚落に入るのを未然に防ぐことができると考えて、実際に、村はずれの峠、村境、道の分岐点、橋のたもとなどにあの優しげなお地蔵さんを祀った。』と述べ、さらに『平安時代の末期ないし室町時代において、お地蔵さんは、第2章で述べた代受苦地蔵という本来の姿から、より積極的に人々の災いを未然に防ぐ姿へと、進化を遂げられたのであろう。村はずれの峠、村境、道の分岐点、橋のたもとなどに祀られている「笠地蔵」のようなお地蔵さんこそ、庶民誰もが親しみの持てるかつ頼りになるお地蔵さんである。』と述べた。

十一面観音と対に祀られている地蔵菩薩は、泰澄の発想により、国家権力を背景に広まったものであり、矢田寺に祀られている地蔵菩薩（代受苦地蔵）は、小野篁の発想により、民衆の信仰心を背景に広まったものである。それらに対し、村はずれの峠、村境、道の分岐点、橋のたもとなどにあの優しげなお地蔵さんは、誰の発想によるものでもなく、自然に民衆の信仰心が生み出したものである。そこに、地蔵菩薩の進化の過程がうかがわれる。民衆の信仰心の広がりというものは地蔵菩薩の性格をすっかり変え、現在では、十一面観音と対に祀られている地蔵菩薩であろうと、矢田寺に祀られている地蔵菩薩（代受苦地蔵）および私の記憶にあるお地蔵さんであると、それらを区別することなく、すべてお地蔵さんであり、「笠地蔵」のような庶民誰もが親しみの持てるかつ頼りになるお地蔵さんのイメージであろう。

時代の流れとともに、これからもお地蔵さんは、進化をしていくであろうが、将来、どのようなお地蔵さんが地域に祀られるのか私には想像できない。

しかし、すべてが複雑で困難な時代、家庭の親父であろうが、会社の重役であろうが、国のリーダーであろうが、怒りを抑えて常に冷静な判断ができる人間が求められている。通常、私たちは、往々にして怒りで血が頭に上り、冷静な判断ができなくなるときがある。私たち人間は、慈悲と怒りの両面を持っている。私たちがその怒りを抑えるためには、やはり仏（ほとけ）の力にすぎるしかないのではないか。自分自身を慈悲と怒りの両面を持っている人間だと自覚し、地蔵菩薩を以って終身の守護とした歴史上の偉大な人物がいる。足利尊氏である。

足利尊氏が終身の守護とした地蔵菩薩は、この論文で縷々述べてきたお地蔵さんとは根本的に性格を異（こと）にする。足利尊氏が終身の守護とした地蔵菩薩は、私たちに幸せをもたらすというより、克己のためのものであり、私が通常抱いているお地蔵さんのイメージとは異なるので、この論文では取り扱わなかった。しかし、すべてが複雑で困難なこの時代、足利尊氏が終身の守護とした地蔵菩薩のような地蔵菩薩が必要かと思われるので、「おわりに」当たって、私の書いた論文「足利尊氏の地蔵信仰」を紹介しておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/takajizou.pdf>